

終了 自死遺族向けセミナー

11月24日ウインク愛知において、午前「遺族のフリースペース」、午後「自死遺族向けセミナー」を行いました。

フリースペースでは10数名の遺族の方が参加され、お茶を飲みながらの分かち合いとなりました。

午後は、桃山学院大学社会福祉学科教員、伊藤高章氏をお招きし「天の会衆と共にーキリスト教の自死遺族支援の視点とスピリチュアルケア」と題してご講演いただきました。



ご講演の中ではまず、「二人称（あなた）の死」のつらさについて、「それまでの自分も共に死ぬ」ことであり、「この世を生きる意味を喪失」してしまうことだと話されました。また、人間は物語を生きる存在だとし、「あなたの死」は「あなたとわたし」の物語の中断であり、その後は続きを書くわけにはいかず、「その人が産まれた時からの物語をその人に死を含む形で全部書き直さなければならない」とのことでした。

次に、キリスト教における自死についての話に移り、「今み

なさんが抱いているキリスト教のイメージは間違っている」と強調されました。旧約聖書では、人間は最初から神の期待に答えられなかった存在であり、神の言っていることはわからない中で、神と「とっくみあい」をしている存在であるということでした。新約聖書においては、人間の罪はすべて帳消しにされたというのが最大のメッセージであり、自死も決して罪ではないということでした。そういったキリスト教の本来性を回復させることが大事であると話されました。

リメンバーin岡崎 1月19日

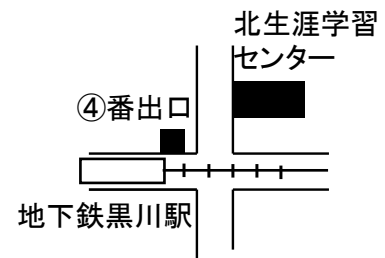
2010年より開催してきました「リメンバー名古屋in岡崎」を、今年度も2014年1月19日（日）に行うことになりました。

今回で4回目となる「リメンバー名古屋in岡崎」を、1月19日（日）に行うことになりました。場所は、これまでと同じく、岡崎市「岡崎げんき館」です。

次回の遺族会

第61回

12月8日(日) 13:15から
名古屋北生涯学習センター
地下鉄名城線「黒川」下車
(4番出口)よりすぐ
参加費: 500円



その次は・・・

第62回 2月2日(日)。
場所は北生涯学習センターです。

日程は、ホームページまたは、電話案内でご確認いただけます。パソコンの方

<http://will.obi.ne.jp/remember/>
携帯電話の方

<http://www.will.obi.ne.jp/m/>
電話案内(録音でのご案内)
090-8544-9408

日時: 2014年1月19日(日)
午後1時15分～午後4時(受付13時)

会場: 岡崎げんき館
愛知県岡崎市若宮町2丁目1-1

TEL: 0564-21-7733

対象: 家族や恋人等大切な人を自死で亡くした人

参加費: 無料(地域自殺対策緊急強化基金助成により)

参加申込み: 事前申し込み不要



リメンバー名古屋10周年記念特集

2003年12月に発足したリメンバー名古屋はこの12月で10年となります。10周年を迎えるにあたり、初期の立ち上げに深くご尽力いただいた梁さんより、お言葉をいただきました。

リメンバー名古屋設立10周年に寄せて

リメンバー名古屋の鷹見さんは私たちの自死遺族の会であるリメンバー〇〇（名古屋、神戸、福岡）の名付け親である。10年前の2003年の夏、神戸で初めて自死遺族の集いを試みた時、鷹見さんは47人の参加者のうちの一人だった。

当時、自死遺族同士の集いは連鎖自殺を招きかねないのでやるべきではないという風潮が強かったが、私自身はすでに病死遺族グループ内の幾度か自死遺族同士の集いを経験し実効性を感じており、また欧米の書籍から自死遺族の自助グループやサポートグループは大変有効であることを知っていたので、遺族支援の立場にある人の社会的使命としても自死遺族のサポートグループもしくは自助グループは十分意義あるものだと確信して、様々な異論や反対意見を浴びながら敢行した。

鷹見さんは、インターネットの告知を見て名古屋でも自死遺族の自助グループを立ち上げたいとやって来たのだったが、初回は机に突っ伏してほとんど身動きできないよれよれ状態だった。神戸のサポーターの多くは、あの状態で自助グループを立ち上げるなんてとんでもない、まず十分な心のケアを行って回復を待って心身が回復してからゆっくりと立ち上げるべきだ、という意見だった。私は確か2回目の集いが終わった後だと記憶しているが、鷹見さんに直接問いかけて自助グループ立ち上げの意思を確認したが、よれよれになりながらも意思は固かった。才気煥発であることも言葉の端々から読み取れた。神戸のグループの一部も応援を約束してくれた。

立ち上げの手法は震災ボランティアや今までのホスピス系の市民活動経験から学んでいたもので、リーダーシップに満ちた発案者が一人いれば何とかなることを知ってはいたが、その後の展開は鷹見さんの持ち前の行動力が存分に発揮され、そそのかした私が驚くぐらいの電光石火・疾風怒濤の早業で何と数か月後の2003年12月には第一回のリメンバー名古屋の集いが開催された。その後約半年程度神戸から応援に行ったが、運営については近藤さん、野村さん、花井さんなど有力なメンバーの加入で安定し、また私自身もリメンバー福岡の立ち上げ支援や自分自身の新規事業である緩和ケア病棟のマネジメントに忙殺されるようになり、名古屋に行くことはめったになくなった。

リメンバー神戸代表 林山クリニック院長 梁 勝則

自死遺族支援活動の立ち上げのころは、神戸でも、名古屋でも、そして福島（日本ホスピス在宅ケア研究会）でも、善意ではあるが偏見に満ちた、あるいは未熟な思念に基づいた自称支援者たちが結構紛れ込んできた。その人たちの欺瞞性あるいは差別性に対して鷹見さんはしばしば憤り、時に基盤にあるものの面妖さに挑み、論争を避けなかった。私も必死で応援したつもりだったが、鷹見さんにとっては十分なサポーターではなかったかもしれない。

「個人の経験の中には、その人にしか分からないもの、他人には伝えがたいものもあるだろう。同様にある世代の経験には他の世代に伝えがたい要素があり、一国民の経験にはその国民にしか分からない一面がある。そんなことは始めから明らかで、今更強調するまでもない。その上で、しかも個人間に、或いは集団相互に、敢えて話を通じさせる工夫こそが文化ではなかろうか」という故加藤周一（夕陽妄語）の一文は在日韓国人として少々複雑な経験をした私には今も強い共感を生み出している。自死遺族は特別でもなく特殊でもない普通の人たちが、寂寥たる現代日本の生み出したよくある死に方の結末としては不当に手ひどい状態に置かれているだけであり、当然適切なサポート受ける権利がある、という私の持論は自分自身が自死遺族となる前も後も変わりはない。ただ一つ変わったことといえば、8年前にわが身のすぐそばで起きた出来事が今なお昨日のこのように何時でもまざまざと思い出され、確かに愛娘が存在していたということと、存在の結末のプロセスへの私のかかわりに関しての悔恨や自責の念や無力感という二重の意味のリメンバーリング意識である。

最近は何年にも一度リメンバー名古屋のメンバーの誰かに自死遺族支援関連の行事でまみえる位であるが、あの当時の出来事の現在における意味の連続性はリメンバー名古屋の活発なMLを拝見するだけで深く感じ取ることができる。「人を孤独や孤立に追いやる」とすると定義からしてそれは社会ではない」（孤独感の心理学 レジシアン・アン ペプロー）末筆ながらリメンバー名古屋の益々の発展を期待するとともに、師走の多忙な時期、皆様お一人おひとりのご自愛を祈念しつつ筆をおく。

リメンバー名古屋 鷹見

2003年8月、神戸の自死遺族の会には、「自分は大丈夫だから他の人のために会を立ち上げる、その参考にさせてもらおう」などという不遜な気持ちで参加しました。そこではじめて、自分以外の同じ体験をした複数の人たちに会い、私の身に起こった「出来事」だけでなく「思い」をはじめて人に話し、消耗して動けなくなり、自分は大丈夫ではないということを知りました。

しばらく継続的に参加してみようと思い、神戸の2回目の定例会には、前夫となる鈴木さんを伴って参加しました（鈴木さんとはまだ出会うまで2週間程度でした）。鈴木さんはほとんど本を読まないのに、遺族心理に関する分厚い本を読み、その後、毎回のように名古屋から神戸まで送り迎えをしてくれ、名古屋では立ち上げの準備の段階から当事者スタッフが固まるまでの数年間にわたり、スタッフとして会を支えてくれました。遺族会が終わるとよく、みなさんの涙と鼻水でぐちゃぐちゃになったトーキングスティックをお風呂場で洗ってっていました。

鈴木さんのご両親は、自死で亡くなった私の両親と同郷で、私の両親や私の家に関する悪い噂を聞いているはずなのに迎え入れてくれ、会の活動にも理解を示し、関連の新聞記事を切り抜いておいてくれたりしました。親の自死という体験を、好意的に受け止めてくれる人がこの世の中に存在するのだということを知り、おどろき、今もありがたく思っています。会の活動そのものも、立ち上げ時、継続的にサポートしてくださったのは、りゃんさんはじめ、ひまわりの会の中村さん、神戸のみなさん、近藤さん、今は休会中の大矢さん、鈴木さん——自分自身は自死遺族当事者ではない方たちでした。

これらの方々は、大げさなようですが私に、人間、に対する基本的信頼感を後天的に獲得さ

せてくれ、そのことが今を支える確かな基盤になっているように思います。

その後の私の変化としては、いろいろなことがありました。

「外でバーベキューなんてめんどくさい、何が楽しいんだろう」と思っていたいやいや参加した遠足の会で（※初回はたしか、告知をせずにスタッフだけで行ったのでした）、初めて食べ物の味がわかり、おいしい、楽しいという感覚を知ったこと（それは、それまで味覚を失っていたことに気づいた、ということでした）、会を立ち上げて2年後にガンになり、価値の大転換が起きたこと（治療を受ける、ということ、生きる努力をする、ということ、それは私にとって未知の経験でした）、死にたい死にたいと言っている私に、いつも死にたい死にたいと言っている遺族会の仲間が「生きていて欲しい」と強く言うのでびっくりしたこと、闘病生活を具体的に支えてくれたこと、そして今また新たな生活をはじめるとあたり、分かち合いや遠足の会で知り合った方々が、具体的にサポートしてくれたこと。

遺族会が無くても、大切な人の死について周囲に心を割って話すことができ、支え合うつながりが持てるようになれば遺族会は必要なくなる、リメンバーに人が来なくなりリメンバーが無くなるのが目標だ、と思っていた時期もありました。

しかし、自分自身のこの10年を振り返って思うに、今は、このつながりをこれからも大切にしていきたい、私自身が生きていけるようになるために必要であったこのつながりの場を、これからもできるかぎり続けていきたいと思っています。皆様、これからもよろしくお願い致します。

12月8日遺族会終了後「望年会」を行います

12月8日遺族会終了後17時ごろから、毎年恒例の食事会を行います。リメンバー（憶えている）ということ大切にしている場ですので、「忘」という字を避け「望」年会としていま

す。

遺族会に参加したことのある方ならどなたでもご参加になれます。12月8日遺族会参加者の当日参加も受け付けます。

次回「ディアレスト」のご案内

日時：2014年1月18日（土）13:30-16:00

場所：名古屋市市中村生涯学習センター

連絡先：the.dearest1@gmail.com

・ http://dearest.heya.jp

参加費：500円

対象：家族以外の人（恋人・婚約者・パートナー・親友・同僚・上司・部下・先輩・後輩・先生・生徒、など）を自死（自殺）で亡くされた方

スタッフ募集

遺族会に参加したことがある方で、会の活動のお手伝いをいただける方募集しています。

遺族会当日に、お茶の買い出し、参加者の案内など、継続的でなくても結構です。

詳しくはお問い合わせください。

新聞郵送をご希望の方へ

1月～6月末までのお申し込み（前期）…1000円 もしくは 80円切手13枚

7月～12月末までのお申し込み（後期）…500円 もしくは 80円切手7枚

お申し込みは、郵便番号・住所・氏名を記入の上ご送金いただくか、切手をご郵送ください。遺族会の当日、受付でお支払いいただいても結構です。

リメンバー名古屋10周年記念冊子

原稿追加募集

「自死遺族のあの日・自死遺族のその後(仮題)」

2003年12月に第一回の分かち合いを開いたリメンバー名古屋は、この12月で10年の節目を迎えます。そこで、これまで会に関わっていただいた皆様の思いを集めた、冊子制作を行うこととなりました。

応募要件

【一般の部】…家族・友人・恋人など、大切な方を自死で亡くされた、概ね70歳以上の方

【リメンバーメンバーの部】…リメンバー名古屋の遺族会に参加したことのある方(年齢制限なし)

規定

「あの日のこと」「あの日の思い」「その後のこと」「その後の思い」「あの人への思い」をテーマに文章をお寄せください。詩、短歌など、短いものも可。

※寄稿くださった全ての原稿を掲載することができませんことを、あらかじめご了承ください。

※掲載にあたり、内容、表現についてご相談させていただく場合があります。

応募期限

2014年1月末(書き始めた方は早めにお知らせください。)

その他

その他詳細につきましては、「リメンバー新聞62号」(ホームページでもご覧いただけます)をご覧ください。下記までお問い合わせください。

問い合わせ

メール: remember_nagoya@yahoo.co.jp

FAX: 020-4668-8925

郵便: 〒460-0003

名古屋市中区錦2-18-5 MBE178

※2011年3月発行
「自死遺族の手紙」



りめんぼー

初めてある遺族会に行った時のことです。場所がわからず少し遅刻して到着し、息を切らしながらその部屋の戸を開けました。その時の光景は、今でもはっきりと憶えています。重い木の扉だったように思います。その扉の向こうはどんな様子なんだろう、どんな人たちがいるんだろう、どんな話をしているんだろうと、ドキドキしながら、恐る恐るその扉を開けたのでした。

その時から、遺族会との関わりが始まりました。リメンバー名古屋にもそのすぐ後から来るようになりました。それから早かったのか遅かったのか、時間の感覚は定まらないのですが、10年という時が流れたのは確かなことのようにです。10年の前後で何か変わるわけではないのですが、区切りを迎えると、どうしてもそれまでの10年の事を考えてしまいます。

10年前に書いた日記を開いてみました。「死んだ者の生きた証を探し/死んだ者の人生を考え/死んだ者を抱え込み/自分の人生を

考え/自分の生きる意味を問い/死んだ者と共に生きている」。

遺族会に行って初めて自分が「自死遺族」であることを知り、初めて「自死遺族」の仲間に出会い、他の「自死遺族」の思いを初めて知りました。この10年というのは、遺族会と、遺族会で出会った人たちと共に過ごした年月だったように思います。

遺族会に関わる必要のない人生だったら、この10年は、全く違ったものだったのでしょ。出会う人たちも全く違ったことでしょう。変更のできない人生において、そのことがよかったのか悪かったのかはなく、ただ受け入れていくしかないのでしょうか。

これから先の10年を思うと、それは予想もつかない途方もない年月のように感じます。リメンバー名古屋は10年後存在するかどうかわかりませんが、自分は自死遺族であり続けなければならないのでしょうか。そこに区切りはなかなか見つかりません。(KN)